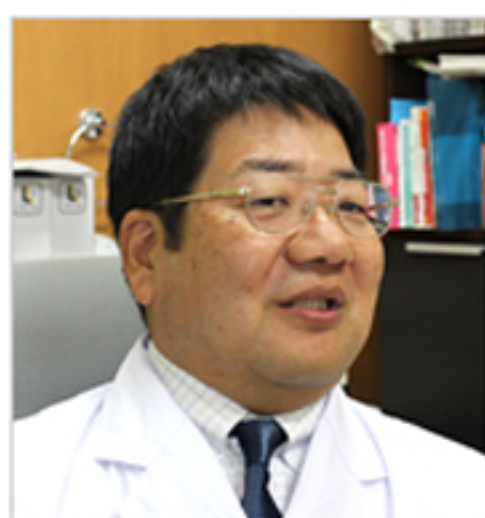


医療の未来をつくる全国からの声

診療所探訪



患者さんへの敬意から生まれる、 思いやりの診療

2013年7月取材

大阪府吹田市
中島内科クリニック 院長
中島 譲 先生

中島内科クリニック院長の中島譲先生は、「もし、自分が糖尿病になったら、きちんとコントロールできるかといえば、正直、自信がありません」と言うように、糖尿病の管理の難しさを大前提に、患者さんがおのこの生活の中で“少しだけ頑張る”ことを促す指導を基本としています。

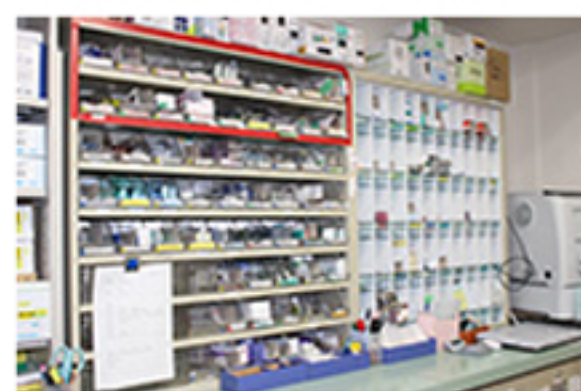
幅広い診療経験を積んだ勤務医時代

中島先生は滋賀医科大学卒業後、糖尿病に特化していた同大の第3内科(当時)に入局。1994年より大阪大学第1内科糖尿病研究グループにも在籍し、30年近く糖尿病を専門に診療を続けています。その一方で、2008年の開業直前まで10数年勤務していた大阪府済生会千里病院では、「医者は何でも診なさい」という病院の方針のもと、消化器疾患の診療にも深く関わり、肝臓がんの血管造影を約600例実施するなど、多くの経験を積んできました。現在は消化器および消化器内視鏡、それぞれの専門医の肩書きも持つ中島先生は、「今の医療は専門特化しすぎている」と感じているそうです。そのため、合併症などで多くの疾患が絡み、広範にわたる診療アプローチが必要となる糖尿病を自らの専門に選んだと言います。



待合室に並ぶゆったりとしたソファやバリアフリーのトイレ(写真右奥の扉)などに、患者さんへの心遣いが感じられます。

“ちょっとだけ頑張りましょう”と呼び掛ける



同クリニックでは院内処方を行っています。その理由について「腰の痛みや足の痛みを訴える高齢者の方が多いので、院内処方を行っています」と中島先生は話します。

「糖尿病の患者さんは食事療法や運動療法など、やらなくてはならないことが多く、全てを完璧に行うのはきつい。だから、生活の中でできることを“ちょっとだけ頑張りよう”というスタンスで私も臨んでいます」と言うように、中島先生のモットーは患者さんの立場になって、決して無理を言わないこと。例えば、食事療法はシンプルに“間食をしない”を基本とし、甘い物は間食ではなく食後のデザートにして、メリハリのある食生活にすることを勧めています。薬物治療も、まず薬ありきではなく、患者さんの生活スタイルに合わせて、無理なく服用できる薬を選択します。「その点で言えば、近年はさまざまなタイプの糖尿病薬が登場し、選択肢が増えてきましたから非常にありがたいですね」と中島先生は言います。

“患者さんはすごい”という思いを抱きながら

「患者さんの立場で」という姿勢は診療全般に貫かれています。糖尿病について説明する際も数値の話ではなく、感覚的に理解してもらえるように、例えば、高血糖時の血液と血管の状態を説明するのであれば、「台所で油を流したら排水管がコテコテになってしまうでしょ。あのイメージですよ」といった分かりやすい表現を心掛けています。そんな中島先生の診療の根底にあるのは、同じ人間として患者さんに抱く尊敬の念です。「糖尿病自体は、特に痛くもつらくもない。それなのに、きちんと定期的に来院し検査を受けて、薬の服用を毎日続けられるというのは、すごいことだと思いませんか?」という言葉からも伝わってきます。クリニックの自慢は「スタッフの雰囲気がいいから患者さんが来やすいこと」と言う中島先生。今後もスタッフと共に、患者さんとの“良いおつきあい”を基本とした診療は続きます。



壁に掛けられた患者さんの作品。クリニック内には、こういった絵画や写真など、患者さんから贈られた作品が飾られていて、その親しい関係がうかがえます。